

1. 単元の構想

本校英語科では、今年度より「目的・場面・状況に応じて表現を選択・調整し、英語で思いを伝え合う生徒の育成～真正性あるやり取り型タスクの実践を通して～」という教科テーマを設定して、日々の授業実践に取り組んでいる。

本単元では、静岡大学の留学生に、日本のポップカルチャーの魅力を伝えるタスクを設定した。生徒が調べた内容を一方的に発表するのではなく、留学生からの質問に答えたり、考えを尋ねたりしながら、テーマについてやり取りを継続することを目指した。また、今回は留学生にも同じテーマでのプレゼンテーションを依頼し、双方向に価値観を語り合う場を設定した。実際に留学生と交流する場面を設定することで、生徒が「何を伝えるか」だけでなく、「相手にどのように伝えるか」「相手の話す内容について、どうすれば理解を深められるのか」を考えながら表現を選択・調整する姿を期待した。

2. 実際の授業

生徒は教科書の内容を読み取った後、それぞれが紹介したい日本のポップカルチャーを選択した。個人で考えた段階では、アニメや漫画、和食、アイドルなどに偏りが見られたが、全体で話し合う中で、100円ショップやメロンパン、キャラクター弁当など、より具体的な題材へと広がっていった。教科書で扱われている、伝統文化と外国文化・近代文化が混ざり合う特徴や歴史的背景を参考にしながら、生徒は「どうすれば魅力が伝わるか」「留学生はどの程度知っているか」「相手の国にも似たものはあるか」と考え、聞き手を意識して内容を構成した。

発表では、冒頭に自己紹介と概要を30秒程度で示す Short Suggestion を取り入れ、その後は相手の反応や質問に応じて即興的にやり取りを行った。授業では、構成を変えながら4人組で練習を重ね、伝える内容や表現を修正・深化させた。

当日はインドネシア、タイから5名の留学生を迎えた。生徒は相手の国の言葉であいさつをしたり、その国について知っていることを伝えたりしながら温かな雰囲気での交流を始め、質問を聞き返して確認したり、相手の理解を確かめながら答えたりする姿が見られた。また、留学生の話にも真剣に耳を傾け、気になったことを積極的に質問していた。



3. 成果と課題

3年生はこれまでの取組を生かし、聞き手を意識して発表内容を構成し、繰り返し練習に取り組むことができた。また、留学生の発表に対しても、相槌を打ったり質問をしたりすることを通して、英語によるコミュニケーションの中で相互理解を実感することができた。一方で、「文化や知識が違うので、そのギャップに苦労した」「うまく伝わらない概念があると感じた」「伝わっていないと思ったときにすぐ言い換えるのが難しかった」といった振り返りも見られた。文化的背景やそれぞれが持っている知識の違いによって、自分が想定していた説明では十分に伝わらない場面に直面したとき、より簡単な表現に言い換えたり、説明の視点を変えたりすることには課題が残った。

今後は、単に発表内容を準備、練習するだけでなく、相手の反応を捉えながら、その場で表現を選択・調整する経験をさらに積み重ねていきたい。

4. 参考・引用文献

阿野幸一(2025)ほか 120名. New Horizon English Course 3 P9-16

文部科学省(2017). 中学校学習指導要領解説 外国語編

国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』. 東洋館出版社